武蔵野日曜聖書講筵

分水嶺
――ルカ伝第18章9～14節――

１９６９年１月26日
小池辰雄

天国か地獄か　自己義認　自己否定　神無き世界　キリストの本願にすがる　あるがままキリストの中へ投げ入れる　謙虚な心　即如　キリストの砕け　キリストの義を受ける

【ルカ18・9～14】

9また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに此の譬を言いたもう、10『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、ひとりは取税人なり。11パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。12我は一週のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」13然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」14われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

●天国か地獄か

実に分かりやすい、読んで字のごとしなんですが、しかし、ここには非常に自由自在なところがある。私は今日これを題して、「分水嶺」と書きました。これを読んで、「分水嶺」というのはいかなることかということは、皆さんは大体ご想像がつくと思います。

人類をもし二つに分類するとならば、私はルカ伝18章のこのキリストの譬話が、これが人類を分類するところのものの規準であると思います。いろんな歴史があり、また環境があり、人種は千差万別に世の中にあります。けれども、人間であるかぎり、どこの民族であろうと、国民であろうと、その人間を分ける一番根本的な規準、これは実はこのキリストの言葉の中にある。

峰に落つる天降るところの水が、その峰の北側に落ちるか、南に落ちるか。あるいは、それが東か西か知りませんが。ヨーロッパでいいますと、西に落ちるものはライン河に下り、東に落ちるものはドナウ河に下ると言ってもいいように、ドナウとラインはあるひとつの分水嶺によって、東するものはドナウ、西するものはラインと言ってもいいような感じの

する――非常にはっきりとはしてませんけれども――大体、そう言っていいような山脈が流れている。

このお話の分水嶺は、しかしながら、ラインでもドナウでもない。これは天国へ通ずるところの流れであるか、地獄に通ずる流れとなるか、どちらの流れとなるかということです。

9**また己を義と信じ、**

と。まず非常にはっきりしている。これが時々申し上げるところの自己義認です。あるいは自己主張でもいい。要するに、自己主張は自己義認からきているわけです。その内容がどんなに客観的に良くあろうとも、また、いわんやその内容が非常に曲がっていることでありながら、頑固であって自己主張する。とにかく、己を立てていることです。

片一方の方は、

「胸を打ちて言う「神よ、罪人(つみびと)なる我を憫(あわれ)みたまえ」」

どうにもならんと。

「もう自分ではどうにもなりません。あなたの絶対恩寵の他にありません」

と。自己義認に対しては、自己否定です。自己義認となるか、自己否定となるかでもって、そこに分水嶺があるわけです。自己義認は、否定に対しては、自己肯定と言ってもいい。人間は、煎じ詰めると、どうもこのどちらかである。もちろん、現実の人間はどっちでもある。義認してみたり、否定してみたり、なかなか定まらない。

●自己義認

「己を義とし、他人を軽しむる」

と言うんだから、他人を見下すわけです。他人を見下して、「俺はただしい」とやっているわけです。

10『**二人のもの祈らんとて宮にのぼる、**

と書いてある。パリサイ人と取税人と、非常なコントラストをなしている。この二人のものが一緒になって、祈ろうと思って宮にのぼる。「宮にのぼる」というのは、神さまの前に出るということです。神前に出る。

一人はパリサイ人(びと)、ひとりは取税人なり。

と。「パリサイ人」は、ご承知のとおり、ユダヤの律法を非常に実践するところの、宗教的道徳的なチャンピオンみたいな人たち。正直、一応立派なんですよね。その一番の模範人は、パリサイ中のパリサイ人は誰あらん、サウロです。まだ「パウロ」と言われない、「サウロ」と言っていた時代のパウロです。サウロ時代のパウロがこのパリサイ人の典型であった。「取税人」はローマの官憲の手先になっているわけで、ユダヤ人に嫌われる。それからまた、いろいろ賄賂をもらったりする悪いのが多かったわけです。パリサイ人は、とにかく自他共にゆるしているところの立派な道徳人、宗教人であるわけだ。

11**パリサイ人、たちて心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・**
姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。

いくら心のうちに祈ったって、これは神さまにはちゃんと響いているんだからね。

12**我は一週のうちに二度断食し、**

大体、月曜と木曜に断食する。レビ記に書いてある。

凡て得るものの十分の一を献ぐ」

みんなこれは旧約に書いてあります。「十分の一献金」ということは、旧約のそれから始まっているわけです。非常に立派に宗教的な生活をしているというわけだ。

「あの人と比較して私は実にそういうように、ご覧のとおりやっておりますが、出来ることを感謝しております」

と。ちょっと善さそうだね。うっかりすると、この角度の祈りが、そんな悪気がなくて、出てくるんですよね。

●自己否定

13**然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、**
「もう、俺みたいな奴は」と、自分を吐きすてるようなわけで、
胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」14われ汝らに告ぐ、この
人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高う
する者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』

そもそも、祈りというのは、他の人と自分とを比較してどうのこうのなんていう、そういう何か優劣を比較するような、そんなような気分であったら、これはもう神さまに通じない。祈りはそんな比較研究ではない。神さまの前に自分が、本当に魂が裸になってまかり出ている姿です。また、人の前に言葉をもって人と共に祈っても、人によく響くような意識、そんなものも祈りが不純になる。いわゆる立派な祈りというようなものですね。いわゆる立派な祈りは、キリストは嫌いなんだ。

それは山上の垂訓の少しあとの方に祈りのことが書いてある。そういう祈りはダメだということをキリストは言っておられる。マタイ伝の「主の祈り」のちょっと前の6章のところに、

「1**汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。**

これも「己の義を人の前に」だ。

然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。2さらば施済をなすとき、偽
善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラッパを鳴ら
すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。3汝は施済をなすとき、
右の手のなすことを左の手に知らすな。

もう全然、そういったものを意識から抜けてしまえというわけですね。

4是はその施済の隠れん為なり。然らば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。5なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕さんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。6なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。」

（マタイ6・1～6）

と。いわゆる立派な祈りをやっているわけだ。自分の実存をそこに何ものかとして数えて、そしてそれを「神に感謝す」と言うけれども、それはやはり自己義認の角度である。そういうような祈りに対して、片一方の方は、

「胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」」

「私はどうにもなりません」

と。まあ、こういう

「罪人なる我を憫みたまえ」

というような言葉は――普通、クリスチャンというのはすぐ「罪、罪」というようなわけで――今度はこういう文句がひとつのお題目式になってしまって、妙に謙ったような、これがまたヘタすると偽善なる謙遜となる。だから、なかなか難しいですよ。その外側の言葉が同じであっても、その心情は如何ということにもなるわけです。この場合はもちろん、取税人は

「自分はしょうがないやつで、どうにもなりません。もう、あなたの憫みにすがるよりかありません」

と言って、ペシャンコになっている。この二つのコントラストを非常に強くキリストは出しておられるわけです。

人間の種類がこのような自己義認となるか、自己を否定するか――神さまの前にですよ、人の前ではない――この二つではっきりする。ところが、神の前に自己義認をしているというのが――普通は「神の前に」という意識がもう失せている――神の前にはもう神を意識しない。本当に神を意識したらば、自己義認なんていうことはあり得るはずは本当はないわけです。

●神無き世界

大体、今の時代の非常に傲慢な魂は――なにも私は若い人をすぐ攻撃するわけではないけれども。もちろん大人の責任であるんです、教育が悪かったから――第二次大戦以後は、とにかく非常に思い上がりの事態が大変多い。そして、要求ばっかりしている。為すべきことをいい加減にしておいて、そんな大騒ぎばっかりやっている。そういう要求者と自己

義認とは似ている。不満ばっかりだ。だんだん世界全体がおかしなことになる。そういうような、要するに神無き世界になってしまっているから、どうしても、自己絶対の角度になって、自己肯定になってきてふくれあがってしまって、これは大変なことです。国際関係でもみんなそう。危なくなるのはみんなそういうことです。

20世紀の今ほど本当の意味において宗教を要する時代はない。今は本当の意味における宗教心、これの饑饉だ。枯渇時代。宗教心の枯渇時代だから、どうしてもこの宗教心を――「宗教心」なんて言うと、

「そんなものは何か抹香臭いな、なぜそんな時代の古いことを言うか」

と言われるよね――「宗教」なんてことを言わなくても、「こころ」でいい。要するに、心の問題なんだ。「こころ」といえば、みんな

「私はこころがありません」

なんて言う人はないわけだ。心の問題から出発する。「宗教」なんて言うと、すぐ誤解される。どうしても、そこから行かなければ。これはもう小学校、中学校、高等学校、大学、みんな同じことです。

●キリストの本願にすがる

この取税人は自分の過去を顧み、また現在を思い、もうどうにもならんというところで、自分を「罪びと」と決めつけたわけだ。これは実は、この取税人の罪びとという意識は、パウロがローマ書7章でついにこの罪びとという自覚を叫んだ。

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の体（からだ）」

と。なぜ、「死の体（からだ）」と言ったか。

「罪の価は死である」

という。どうにもならん。生ける屍（しかばね）である。こいつにぶつかって、そして、神の前に自分を投げ出して、絶対恩寵にすがる。本願にすがる。これが

「憫（あわれ）み給え」

です。キリストの本願にすがる。神の本願にすがる。その時に、この分水嶺の水は天国の方に向かって流れていく。

あの十字架上の強盗がそうでしょ。片一方の強盗は、

「お前が神の子なら、俺たちをひとつ奇蹟をもって救ったらいいだろう」

なんて、これは傲慢の霊だ。この強盗は最後まで傲慢で、傲慢な要求をしている。自分はひとつも顧みられてない。自己義認の角度から、ただ要求ばっかりやっている。これは地獄往き、地獄落ちだ。ところが、もう片一方の盗賊は、

「私はとにかく悪いことをしました。もうしょうがありません。マイナス99です。それでも、どうぞ、あなたが天国にいらっしゃるときに、せめても私を

覚えてください。忘れないでください」

と。それが本当に

「**我を憫みたまえ**」

ということです。キリストが、

「**汝、今日、我と偕にパラダイスにあるべし**」

と言われた。

「**お前は今日、私と一緒にパラダイスに往くんだ**」

と。もうそれで、地獄に落ちる寸前に、これは天国の方にゆく。片一方は地獄に落ちる。同じルカ伝ですよ。23章43節です。

「[42]**また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』**[43]**イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』**」（ルカ23・42～43）

という。

●あるがままキリストの中へ投げ入れる

キリストは、とにかく自分を本当に何ものともせず、あるがままの自分をぶちまけていく、そういう在り方を喜ばれる。福音にぶつかると、我々は――それがもし「真実」というなら「真実」です。いわゆる「真実」というひとつの表現で何かを決めつけてしまうような言い方は私は嫌いですけれども。それが要するに「あるがまま」ということです――あるがままの自分の姿をそのまま出していく。祈りでもみんなそうです。ことに祈りの世界はそうですね。何かそこに観念が混ざってきたら、パッと祈りはやめた方がいい。祈りの言葉が浮いたらダメです、本当に神に向かってぶつかっていないと。

そういうのが、取税人の方です。取税人はこの時本当に、

「**神さま、この罪びとなる私はもうどうにもなりません**」

と言った。たったこの一語でもって自分をぶちまけているわけです。自分を本当に投げ出している。

「砕け」ということを私は前によく言いましたが――もちろん今でも言いますけれども――砕けの心です。神の前に、キリストの前に自分がぶっつぶれて、平伏して――「砕け」でもいいし、「平伏し」でもいい。そこを間違えては困るですよ、

「あるがまま」

とかいろんな言葉で言いますが――「平伏（ひれふし）」「砕け」「あるがまま」というこの投げ出しは同時に、キリストの中へと平伏し、中へと砕けていく。中へとあるがまま入れていく。この

「キリストの中へと」

ということですから。

「ダメだ」

と言って諦めたような、そういう妙な消極ではない。平伏しとか、砕けとか、あるがままというのは、そのまま投げ出されたもの凄い積極なんです。

「キリストの中へと自分をぶちまける。自分をキリストの中へと投げ入れる」

これがキリストが最も喜び給うところなんです。傲慢な気持で投げ入れてたって、それはダメですよ。

「これはひとつどうかしろ」

なんて、そうじゃない。そんなことしたら、蹴飛ばされてしまう。本当にもうある時は泣きの涙で――何でもいい、とにかく――キリストの中へと自分を本当に入れる。これが

「罪びとなる我を憫み給え」

ということです。この「憫み給え」というのは、すがりつくわけです。中へと自分を投げ入れることです。これが、

「門を叩け。さらば開かれん。求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん」

という、あの「尋ね、叩け、求め」というのと同じものがここでやはり生じているわけです。何を求めているかというと、キリストを求めているんだから。その他の何も求めない。我々はキリストを求める。

「あなたを求める。あなたの他、何を求めんや」

というわけです。そうしたら、キリストは無条件のひとですから、ちょうどこれと同じなんだ。十字架上の盗賊が、

「せめても私を覚えてください」

と言ったら、

「よしっ、お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言って、グーッとキリストは引き上げてしまった。

ザアカイが「キリストとはどんな人か」と見ようと、木の上に登った。それを見てキリストは、

「お前の家に今日は行って泊まるぞ」

と言う。これは求め以上のものが与えられていくわけです。あの取税人もびっくりしてしまった。それでもう一晩でみんな改宗してしまった。これが福音です。いわゆる悟り澄ましの世界ではないですよ。

●謙虚な心

ひとつ、旧約聖書を開こうかな。イザヤ書の10章15節、

「15 **斧はこれをもちいて伐(き)るものにむかいて己みずから誇ることをせんや。**

鋸はこれを動かす者にむかいて己みずから高ぶることをせんや。」（イザヤ10・15）

という面白い言葉がある。斧や鋸は、使われる人のままになっている。誇りの心がいかん。自己の高ぶりの心がいかんということです。謙虚な心、砕け、謙り、平伏し、何と言ってもいい。

それから、箴言の16章5節、

「すべて心たかぶる者はエホバに悪まれ、手に手をあわするとも罪をまぬかれじ。」（箴言16・5）

心たかぶったら、いくら手に手をあわせて拝んだってダメだ。そんなものはいい加減な祈りだと。

それから、エレミヤ記18章1節、すえもの造りのところです。

「1エホバよりエレミヤにのぞめる言いう。2汝起て陶人の屋にくだれ。我かしこに於てわが言を汝に聞かしめんと。3われすなわち陶人の屋にくだり視るに轆轤をもて物をつくりおりしが、4その泥をもて造れるところの器、陶人の手のうちに傷ねたれば、彼その心のままに之をもて別の器をつくれり。5時にエホバの言、我にのぞみていう。6エホバいう、イスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすことをえざるか。イスラエルの家よ、陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり。

陶器を造る人の自在に陶器は造られている。そこねれば、別なものを造る。我々は神の御手のうちにあるので、自分でもって何かできると思ったら、とんでもない間違いだと。

7われ急に民あるいは国をぬくべし破るべし滅ぼすべしということあらんに、8もし我がいいしところの国その悪を離れなば、我之に災を降さんとおもいしことを悔いん。9我また急に民あるいは国を立つべし植べしということあらんに、10もし其の国わが目に悪く見ゆるところの事を行いわが声に遵わずば、我これに福祉を錫えんといいしことを悔いん。11汝いまユダの人々とエルサレムに住める者にいえ、エホバかくいえり 視よ我汝らに災いをくださんと思いめぐらし 汝らをはかる計策を設く故に汝らおのおのその悪しき途を離れその途と行いをあらためよと。」（エレミヤ18・1～11）

国を滅ぼすと言っているけれども、もし悔い改めて悪を離れれば、災いをくだすことを悔いるぞと。しかし、立てようと思ったときに、目の前に悪いことをしたらば、そいつは今度は、幸いを与えようと思ったのを悔いて、滅ぼしてしまうぞと。要するに、神の手の中、その支配のうちに我々はあるのであって――ルターが言った

「神の独占活動」

ということ――神の力の中に我々はあるので、御旨を謙遜に承ってそれによって動くとい

う、この根本的な人間の態度を忘れたらおしまいであるということです。

●即如

それから、砕けのところに行けば、いつも私が引用するイザヤ書57章です。

「15**至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此いい給う、我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ、謙だるものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす。**」（イザヤ57・15）

もちろん、このパリサイの方でも、自分のパリサイ根性を改めて、一週間に二度、本当に心から断食をし、得たものの十分の一を本当に献げて、

「いやいや、もっともっと、私はしたいと思います。五分の一を献げます。みんなあなたの恩恵の力によるのです」

と言って、自分を何ものともしないで、

「一切、神の恵みの力、その意志によって動いているんだ」

と言って感謝するならば、ひとつも悪くはない。自分の側に受けとって、自分の実存を誇るようになったから、これはダメだという。だから、内容の如何ということよりも、その言葉がいかなる態度で、いかなる心の態度で発せられているかに決するわけです。客観的にどうということではない。

そういうわけで、

「人の心腸を見たもうところの万軍のエホバよ」

と、エレミヤが言いましたところですね。エレミヤは心の預言者です。宗教の世界は、外側のことでどうのこうのと判断する世界ではない。心の在り方です。

心の在り方を「砕け」だとか、「平伏し」だとか、何とかかんとか言ったのを、私がいつも言うもう一つの言葉でいうと、これが「無」ということです。無も、無を何ものかと思うような無でもない。これは、言葉というものは説明すると、ひとつズレてしまう。だから、最後の世界はもはや説明ができない世界になる。

これが、いわゆる「即如」という境地になる。キリストに即して、あるがままに――「如」というのは「あるがまま」に、在るが如しということ――

「あるがままにしてキリストに即する」

ということが「即如」ということ。あるがままにしてキリストに即する。「あるがままにしてキリストに即する」ということは、こちら側からは不可能です。恩寵の故に、十字架・聖霊の恩寵のゆえに、これが可能となる。これは、

「砕けたる清き心は……」

というあの詩篇51篇もみな同じ角度です。マタイ伝の11章29節でキリスト自身の言葉に、

「私は心が柔らかい、そしてまた謙っている者である」

という言葉がある。25節から読むと、

「25**その時イエス答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰児に顕し給えり。26父よ、然り、斯の如きは御意に適えるなり。27凡ての物はわが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。28凡て労する者・重荷を負う者、われに来れ、われ汝らを休ません。**

「休ません」というのは、休みの中に入れて力を与えるということですよ。

29**我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に学べ、さらば霊魂に休息を得ん。30わが軛は易く、わが荷は軽ければなり』**」（マタイ11・25～30）

●キリストの砕け

ところが、この砕けは今度は、キリストの砕けです。私たちは砕けきれはしないんだから。無も、キリストが与えてくださる無なんだ。十字架が罪から自己から完全にぬいてくださる。十字架が私たちに私心なき世界を与えてくださったから、即如の世界を与えて――即如というのは十字架と聖霊と両方です――キリストの霊が臨んできた。これが即如です。キリストの霊が臨んできたらば、無ではないんだ。無即無限、無即無量なんだから。

「あるがまま」

が即、

「キリストの中に入っている」

ということ。そして、あるがままの我々は時々刻々に展開させられていく。

そういう事態になりましたから、

「ああ、罪びとなる我を憫みたまえ」

と言って投げかけた自分は、その次の瞬間には、力あるところの世界に、キリストの義の住むところの世界に、躍動するところの世界に、キリストの愛の動く現実に――本当の自由、力、生命、何と言おうともいい――そういう世界に入る。「ああ、罪びとなる我を憫みたまえ」という叫びのあとに、そういうもの凄い世界に――これは「叫び」と言ったって、叫ぶと同時に投げ入れるんだ――そうしたら、その力の世界に入りますから。いかにも惨めなようだが、実は惨めではない。一番これが権威あるところの世界に入ってしまう。前の

「俺こそは」

と言っているのがダメになる。どんなに力がありそうでも、それはダメです。もう逆転してしまう。

自分は深く谷底へ落ちていく。谷にたたえている深渕の水のごとく。そこには星が宿る。キリストの姿が宿る。すると、たちまち天国的現実になるわけですね。だから、取税人の祈りの世界は、なんだか情けないようだが、実はどん底にくだされている人は、実は最も

力強い世界に直ちに突入するわけです。

「**己を卑(ひく)うする者は高うせらるるなり**」

というのは、

「本当にどん底に行ってみたらば、どっこいそこは天国であるぞ」

ということで、

「人から高うせられて、崇められて、尊敬されて」

と、そんなことを言っているのではない。そういうのが、我々がこのキリストの譬話から、グッと把(つか)むところの現実であると思う。

●キリストの義を受ける

『ファウスト』の中に、これはメフィストが語っている言葉だけれども、一九八三行の所に、学生ワーグナーと語っているところがある。メフィストが、

「私は君に方向を誤らせたくない。この学問となると、

「この学問」とは神学のことだ。

誤った道を避けることがすこぶる困難なのだ。こいつの中にはたくさんの毒がひそんでいる。

いわゆる神学の中にはね。

それが殆ど薬と見分けがつかないんだ。この場合にも一番いいのはただ一人の教師につき、

「教師」というのはキリストのことです。

ただ一人のマイスターにつき、その先生の言葉を金科玉条として受けとることだ。」

と。やっぱり、ゲーテというのは分かることが分かっている。「神学」なんて言って、いろんな説をどうのこうのとやったってダメだよ。

「ただ一人の人に聞け。そのマイスター、即ちキリストというマイスターの言葉をよく守りなさい」

と。キリストのこういった言葉の中に自分を投げ入れて進んでいく。

「福音書中、これ以上特色ある譬話はなく。これ以上にイエスの教えの根本義を表しているものはない」

と、これはユダヤの神学者がこのことを言っている。それくらい、このキリストの福音は、いかに神の前にぶっつぶれた魂が大事であるか。このことは、

「**幸いなるかな、霊の貧しき者**」

と相通ずることはもちろんです。

この取税人は一体何をみやげに帰って行ったか。宮で祈って、何を持って帰りましたか。神の義、キリストの義をもらって帰った。片一方のパリサイ人は、おのが義を完全に奪われた。

これこそ全くどうにもならなくて帰っていくということになるわけです。
要するに、
「祈りの内容がこうであるから、ああであるから」
ではなくして、祈りの、
「祈るその心がどのような向きをもっているか。それによって内容を私しているか、本当に神のものとしているか」
それだけの話です。
恵みは、いくら恵みのことを語ってもいい。神を本当にたてて、それが私されていなければ、パリサイの祈りも、本当の意味において立派な祈りになりうる内容をもっている。けれども、これが私されたところが悪い。また、片一方は、
「**罪びとなる我を憫みたまえ**」
というのが、もしお題目になってしまって、いわゆる上辺の謙遜であったら、これもどうにもならん。
信の世界の決定的な、私たちの規準となるところのものは何かというと、キリストの十字架を受けること。これを忘れたならば、パリサイになる。もうこの一点に尽きるわけです。
国際関係の動きを見てても――多少、あのライシャワーなんてのはなかなか判断がいいですよね――中共であろうと、ソ連であろうと、お互いに本当に認めあって行けばいいではないですか。イデオロギーなんかに妙にこだわるからおかしなことになる。もっと大きく人間というところを本当に自覚していく。しかしながら、中共それ自身がいいのでも、日本が悪いのでも、何でもない。みなそれぞれ、
「神の前に果たして在り方がいいか悪いか」
これはただ神の前にだけ判断されることです。そして、その国は審かれていく。我々は、
「神の前に」
ということを忘れたら、個人であろうと、また団体であろうと、社会であろうと、国家であろうと、これは本当に――ヒルティーは
「ガイステイゲ　ヴエルト　オルドヌング」「道徳的（霊的）世界秩序」
と言いましたが――
「霊的な世界秩序」
というものが厳として存する。それで、私たちの心は本当に定まれりというものだと思います。どうぞ、その点で、本当の意味において、「砕け」と本当の意味における権威とをもって進んでいきたいと思います。